

ごあいさつ

助成研究成果集第29号の発行に際し、一言ご挨拶申し上げます。

当財団は、オムロン(株)の創業者であります故立石一真が卒寿を迎えましたのを機に、科学技術の分野で「人間と機械の調和」を促進することを趣意として1990年(平成2年)に設立しました。そして設立趣意に沿った研究課題に対して毎年助成を行ってきた結果、設立以来の累積は、立石賞も含めて助成件数1,381件、助成金26億円となりました。これも日頃からの皆様のご支援の賜と感謝いたすところでございます。



本成果集の発行は成果普及活動のひとつとして行うもので、助成対象となった研究課題の成果を、財団設立の趣意に沿って方向を同じくする研究者や研究機関と共有することを目的とするとともに、研究者の相互交流の一助となることを願って、毎年実施しております。今回ご寄稿いただきました研究者の皆様をはじめ、ご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

さて、毎年実施しています助成金贈呈式は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止とし、隔年で実施している立石賞の表彰式および記念講演は、延期とさせていただきます。残念ながら式典は開催できませんでしたが、第6回立石賞の受賞者ならびに2020年度助成金贈呈対象については、ホームページやメディアで公表させていただき、助成金の交付もとりおこなうことができました。研究助成を受けられた皆様には、近い将来の立石賞を目指して、引き続き研究に邁進されることを期待します。

ところで、今日、日本は、AI、IoT、ロボティクス、および自動運転技術など将来に向けた科学技術が産官学連携のパートナーシップの下、進められています。最近では、当財団が目指す「人間と機械の調和や協業を促進する科学技術分野への各研究開発が、世の中において積極的に推進される一方で、気候変動・地球温暖化をはじめ国際的な共通課題であるSustainability(持続可能な社会)の実現に向けた取り組みが広がりつつあります。

今まさに全人類が脅威にさらされている新型コロナウイルス問題は一刻も早く収束させなければなりません。また先進国の中でも特に日本で深刻化しつつある少子高齢化問題を含め、社会的課題は山積しています。これらを克服し、日本が活力を再び取り戻し国際社会に貢献するためには、卓越した科学技術の力をさらに高めることが求められております。当財団は、民間の立場から、微力ながらも日本の科学技術の発展に対して寄与していく所存であり、今後も研究者の皆様を託して参ります。

今後の活動に対し、皆様方のより一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2020年10月

理事長

立石文雄